



〈連載58〉

今年の夏の船旅 (その2)

— 太平洋フェリーの「きそ」の船旅 —



大阪府立大学船舶工学科助教授

池田良穂

今年の 夏には北海道航路の2隻の長距離カーフェリーに乗船することができた。一隻は名古屋～仙台～苫小牧航路の「きそ」、もう一隻は岩内～直江津航路の「はあきゅり」である。今月はまず「きそ」の旅を紹介してみたい。

この船に乗るのはこれが3回目である。太平洋フェリーが、車両搭載能力の拡充のためにフェリー新造に乗り出した最初の一隻で、就航当時名古屋まで船内を見学に行った船好きの友人が、今までの日本のフェリーにないほどのグレードの船であると、興奮気味に電話をくれたことを今でもよく憶えている。それを聞いてすぐ、次の東京への出張を、名古屋から同船に乗船して仙台に上陸し、新幹線で東京に向かうルートに変更した。内装は茶色をベースにしたなかなかシックなもので、ゆったりとした船内が素晴らしかった。しかし一方、省エネタイプのエンジンを積んだこともあって、船内の振動の大きさには驚かされた。この船がすっかり気に入って、この後、船ファンの仲間40人ほどを集めて一緒にゴールデンウィークに名古屋～仙台の船旅を楽しんだのが2回目。そして、今度が3回目の船旅ということになる。

名古屋から 乗船する当日に、ちょうど台風

が近づきつつあった。これは荒れるかもしれない。一緒の家族には悪いが、揺れる船への期待感はある。しかし、欠航されては大変。大阪を車で出る前に会社に電話すると、いまのところ予定通りに出港の予定とのこと。

名古屋のフェリー・ターミナルに着くと「きそ」が静かに停泊していた。風も波もそれほど強くはなっていない。7時に乗船開始。運転手役の女房とは別に、娘と愛犬をつれて人道橋を通過して船に入る。船内に一歩足を踏み入れた途端、その雰囲気以前とがらっと変わっているのに驚いた。ブルーを基調とした明るい内装に全面改装されているのである。太平洋フェリーの最新鋭船「いしかり」の船内の雰囲気とよく似ている。同社によれば、この春のドック入りの時に、4億円近くかけてカリブ海風に全面改装したとのこと。最近、太平洋フェリーはカリブ海にぞっこん惚れ込んでいるようだ。

キャビンは一番船首側にある貴賓室。ずいぶん立派な室内で、最近のクルーズ客船のキャビンに比べると数段上のレベルだ。出港前に、突然、以前カリブ海クルーズと一緒にいった太平洋フェリーの方がキャビンまで訪ねて来てくださった。

8時。いよいよ出港である。ちょうどレストランに居たが意外にエンジンの振動がしない。就航以来かなりの改修工事を施して振動問題もほぼ解決されたようだ。食事の後はラウンジでのバラエティ・ショーを見る。国内のカーフェリーで毎航海こうしたエンターテイメントを実施している例はほとんどない。このあたりもカリブ海仕込みのアイデアのようだ。しかし船が伊勢湾を出てピッチングが大きくなりはじめたこともあって、せっかくのショーにも観客が少なかったのは一寸さびしかった。

船首部にあるキャビンに帰ると、船が大きく揺れているのがよく判る。船の後部のレストランやラウンジ附近に比べると、体を感じる加速度がかなり大きい。深夜になると、時々窓ガラスを波しぶきが叩くようになる。

一夜あけると、うねりは残っているものの海面

はだいぶおだやかになってきた。天気もよくなってきて、昼すぎからは平穏な航海となった。ブリッジを見学させてもらい、船長と船談義。船乗りの話はいつ聞いても面白い。この船には女性の航海士が乗船しており、娘と一緒に写真をとって頂く。船ばかり乗せている娘だから、そのうち船乗りになる、と言いだすかもしれない。

時間を おって海は静かになっていく。天気もよくなり、きらきらと陽光に輝く船首附近の海面にまわりつくようにイルカが見える。日本のカーフェリーにはずいぶん乗っているがイルカを見るのはこれが初めてだ。この日の2時過ぎに船は僚船「いしかり」と反航。白いウェークを長く引いて名古屋へと疾走する姿が美しい。さすがに夏のシーズンだけあって船内は乗客で一杯。中でも「宮城県の少年の船」に参加している子供たちで賑やか。子供のうちから海や船に親しんでもらえるこうした企画はぜひとも続けてほしいものだ。



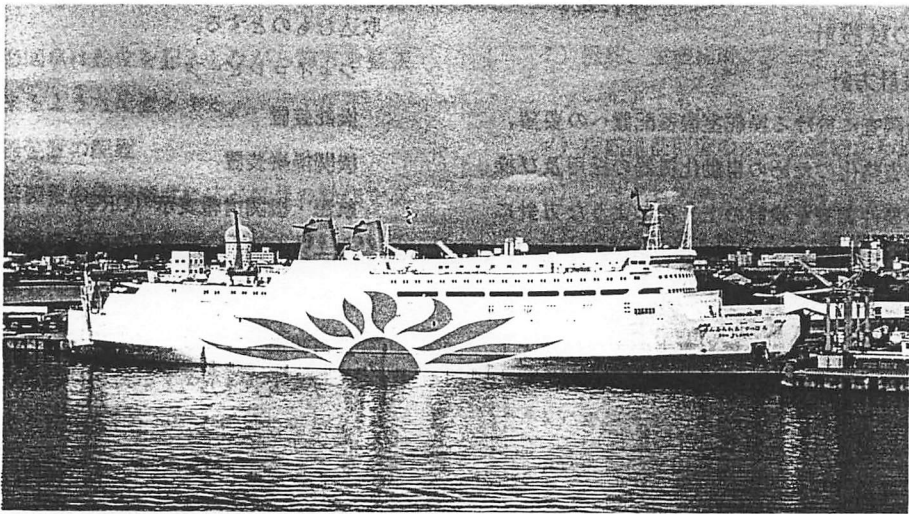
「きそ」



5時に仙台に到着。8時の出港までだいぶ時間がある。ターミナルの近くの公園で開かれた「少年の船」の解散式をのぞいたり、近くを散歩したりした後、再び乗船。仙台からもほぼ満船状態。レストランでの夕食はカフェテリア式の典型的なフェリーの食事。用意されているメニューは航海中ほとんど変わらないから、昼食も入れると3回同じ料理を見ることとなり、いささか食傷気味に

なる。バルト海のクルーズフェリーのように、もうひとつくらい雰囲気違った少し高級なレストランが欲しいところだ。

翌朝、苫小牧の港に到着。横の岸壁には東京航路のブルー・ハイウェイ・ラインのカーフェリー「さんふらわあさっぽろ」の姿があった。暑かった大阪とは一変して、北海道は涼しい。車のクーラーを入れる必要はもうなかった。



「さんふらわあさっぽろ」